

# 「総合的な学習の時間」と時事問題（現代的課題・地球的課題） を結びつける

・・・ SDGs と「総合的な学習の時間」・・・

法政大学キャリアデザイン学部兼任講師 本山 明

## 1 研究目的と研究課題

地球温暖の進行、続く戦争とテロ、経済格差の拡大などの現代的課題・地球的課題はその解決を私たちに迫ってきている。特に日本においてこれらの課題に応える教育は十分とはいえない。いかにしたら学校のなかで自立した市民として育ち、主体として育つ機会があるのか。その切り口として、日々、報道されるニュース（時事問題）を教室に引き入れ、子どもたち・学生が考え合い、交流、刺激し合い、一市民として育つ授業の研究をしていきたい。時事問題を考えることが、授業、「総合的な学習の時間」において、子ども、生徒、学生にどのような教育的意味を持つのかを研究する。

## 2 戦中の時事問題

### (1) 「時事問題と教育」 清水幾太郎 より

「昭和17年の初め・・・小学校に通っている子どもの教科書がいわゆる戦時色に彩られることを知ってびっくりしたことがあります。いつの間にか沢山の時事問題が教科書に盛り込まれ、あの大東亜共栄圏に関するさまざまな事実と理想とが学校教育の内容になっているではありませんか。教科書が戦局に合わせて作られていると私は感じました。今、私はびっくりしたと書きました。しかし実を言うと戦慄した、と申すべきでありましょう。(中略) 子どもは黙って勉強していれば良かったのであります」「こう考えて来れば日本の教育は、というより日本の社会は、子どもが時事問題に触れぬことで持ってきたと言えるのではないのでしょうか。子どもを時事問題から遮断する事、万一これに触れた時は、これに頭からおっかぶせるだけの大義を予め持たせておくこと、これが眼目であったとみられます。しかし、それだけでは追いつかぬという焦りが、戦争中のあの教科書を生み出したと考えるほかはありません。そして、その時、日本の教育は、教育よりも、むしろ宣伝の方向へ決定的な一歩を踏み出したと言わねばなりませんまい。」<sup>(1)</sup>

### (2) 初等科国語三 教科書<sup>(2)</sup> より

#### 四 君が代少年

昭和十年四月二十一日の朝、台湾で大きな地震がありました。

公学校の三年生であった徳坤（とくこん）といふ少年は、けさも目がさめると、顔を洗ってから、うやうやしく神だなに向かって、拝礼をしました。神だなには、皇大神宮の大麻がおまつりしてあるのです。それから、まもなく朝の御飯になるので、少年は、その時外へ出てみた父を呼びに行きました。家を出て少し行った時、「ゴー。」と恐しい音がして、地面も、まはりの家も、ぐらぐらと動きました。「地震だ。」と少年は思ひました。そのとたん、少年のからだの上へ、そばの建物の土角（どかく）がづれて来ました。(中略) 少年は、あくる日の昼ごろ、父と、母と、受持の先生にまもられて、遠くの町にある医院へ送られて行きました。「おとうさん、先生はいらっしゃらないの。もう一度、先生におあひしたいなあ。」といひました。これっきり、自分は、遠いところへ行くのだと感じたのかも知れませんが、それからしばらくして、少年はいひました。「おとうさん、ぼく、君が代を歌ひます」少年は、ちょっと目をつぶって、何か考へてゐるやうでしたが、やがて息を深く吸って、静かに歌ひだしました。

きみがよはちよにやちよに

徳坤が心をこめて歌ふ声は、同じ病室にゐる人たちの心に、しみこむやうに聞えました。

さざれいしの

小さいながら、はっきりと歌はつづいていきます。あちこちに、すすり泣きの声がありました。いはほとなりてこけのむすまで

終りに近くなると、声は、だんだん細くなりました。でも、最後までりっぱに歌ひ通しました。君が代を歌ひ終った徳坤は、その朝、父と母と、人々の涙にみまもられながら、やすらかに長い眠りにつきました。

昭和十七年二月十六日発行<sup>(3)</sup>

教師用 初等科国語三 文部省  
文章

「このつらい手当の最中にも、少年は、決して台湾語を口に出しませんでした。」

苦痛を訴へるほとんど無意識的な語も台湾語ではな

かったことを意味し、以下徳坤の国語に対する平生の心構が簡明に叙してあるが、これも適当に補説して感銘を深くするがよからう。

#### 取扱の要点

文に即して発言を正し、文字・語句等を指導し、確実に読ませる。読みが進むにしたがひ、主人公徳坤の環境を明らかにさせ、その行ひを文に即して読み取らせる。

神棚に拝礼したこと

自分の重傷をも忘れて、母のことを気づかったこと

常に国語を使ひ通したこと

早くなほって学校へ行きたいといったこと

最後に苦しい息の下から、君が代を歌ってなくなったこと

等がその主なる点であるが、あくまでも本教材を通して、児童に感銘を与えるべきである。

### (3) 時事問題の両義性と「政治的中立」

戦争を遂行するために戦局に合わせ時事問題を教科書に入れるということが、国により行われていたとの清水の記述には納得のいくものがあった。政治的中立性は授業の場において配慮されなければならない。市民として自律し民主主義の社会をつくりだすには一人ひとりの自由な意見表明と意見交換で自己の政治的な考えをつくる必要があるであろう。

しかし教室という場で政治・社会問題をこども・生徒が語ることは今の社会の雰囲気の中では容易ではない。著名人がひとつの立場をもって発言するとネット上で叩かれることは日常的にある。国会の場でも、質問や意見に対し不誠実な答弁がまかり通る。

現代の政治的状況において権力を持つ者から、教室における授業の内容の「政治的中立」が問題視されることがある。

権力を持つ者が「政治的中立」を語る時は疑う必要がある。自分たちの政策を押し通すために、批判をさせず疑いを持たせないために、「政治的中立」を掲げてくる。ある意味では「政治的中立」とは権力から遠いところにあるのかもしれない。

こども・生徒からの時事問題を通じた問題提起は上記の構造からも有益だ。

時事問題には両義性があると思われる。この時代の本当の時事問題は戦争のリアルな状況であったはずだ。何を時事とするのが授業者には問われている。

## 3 戦後初期社会科の時事問題

### (1) 「時事問題は問題である」 勝田守一 より

「平和的といっても、社会に利害が反する対立がある以上転換に伴って何らかの犠牲や混乱が生ずるのはやむをえない。それまでを否定したならば、何ほどの変化も期待できまい。しかし大衆の納得と理解が進められ、自覚した行動が知的に強まれば強まるほど、この転換は平和と合理性のうちに進むであろうことも確かである。そして、それは教育が受け持つ仕事であるはずである。時事問題は、しかもそのような教育の本質的な性格をおびている。このコースは、政治、経済、社会の動向の中に、いかに生きるかを、知的な探究と自主的な判断を通じて青年たちが学ぶコースだからである。これはきわめて難しい指導だということはくりかえしいわなくてはならない。教師にとってもこれはやっかいな仕事である。けれどもこれを生徒とともに考え、青年たちの心に火を点ずる契機とするかどうか、教師の良識と良心にかかっていることも事実である。私たちはこの困難な仕事を、この困難な時代に引き受ける教職の重さを考えるとともに、ここに一つの希望がかけられている事実を見逃してはならないと思う。そして、それが基本的な深さに達するためには、やはり、理論の歴史的背景への顧慮を現代の問題に結んでやらうことがきわめて有効な方法ではないかと愚考している。」<sup>(4)</sup>

### (2) 批判的思考の醸成

勝田は教員に時事問題を通じて生徒とともに考え青年たちの心に火を点ずる契機とすることを期待している。時事問題のコースは、「政治、経済、社会の動向の中に、いかに生きるかを、知的な探究と自主的な判断を通じて青年たちが学ぶ」と書いている。

時事問題は1947年の学習指導要領で制度化され高校の選択科目となった。1955年の学習指導要領でなくなる。その理由はいくつかあるであろう。大きな原因は教員の時事問題を扱う意味、切実さの欠如、準備不足があると思われる。社会は東西の冷戦に入っていく。その点では扱いにくさも出てきただろう。短命で終わったが千葉、三重、京都、新聞教育と繋げた東京の高校などいくつかのプランや実践がある。<sup>(5)</sup>

現代において教員はどのような時事問題を取り上げ、どう展開すればよいのか。より具体的な枠組みが明らかにされる必要があると思われる。

「批判主義の社会科」の中で池野範男は「問題の第三はこの定義には社会との関係が明示されていないために、社会科が『社会』という名称をもちながら、それを学習対象に限定してしまったことである。(中略)その結果、社会科が単に社会を知るだけの教科となり、子どもたちの学習において社会離れを引き起こしているのである」

社会科が社会の実実やそのことと関連する政治や経済のありようを探っていく教科になることが必要である。その意味では、批判的思考を、こども・生徒が身につけていくべきである。池野は「市民的資質は、社会の中に位置づけられた市民、あるいは社会を作り出す市民として必要な能力や態度である。このような態度や能力こそ、社会科が実質的に掲げる目標である。民主主義を社会編成原理とした現代社会の市民に必要な能力や態度とは自律した市民にとってのそれであり、その能力と態度は一言で言えば、批判であろう」

池野は「批判的（対抗的）公共性」という理念をドイツの『中等政治的陶冶』シリーズから導き出している。<sup>(6)</sup>

新学習指導要領を参照しても多く出てくるキーワードは「見方・考え方」と「多面的・多角的に考察」である。この二つのキーワードは現学習指導要領でも使用されている。「見方・考え方」は全教科に共通する深い学びに至る筋道としての用語になっている。「多面的・多角的に考察」は様々な角度の切り口、異なった見方・考え方、意見、主張、立場でと読み取ることができる。

学習指導要領では批判という文言はほとんど使わない。

批判とは自分の意見をもって、現状をただすことであろう。子どもたちの意見表明である。主体的になるには批判的な思考の育成、社会的な提言、社会参画が必要ではないか。

## 4 「総合的な学習の時間」の実践

### (1) 全校総合学習

葛飾区立本田中学校（著者の所属していた学校）の取り組みで1999年度から始まる。

#### ① 「地球の光と影」

2005年、3月に本校の体育館で総合学習の発表がおこなわれた。その中で特に注目をあつめたのは、「地球の光と影」というテーマでの中学3年生の誠也と秀平の発表であった。

「アフリカでは、今までに数々の内戦が行われてきました。例えば、ナイジェリア内戦、ルワンダ内戦、コンゴ内戦などがあります。」アフリカでは、今一番深刻な状態にあるのがスーダンです。スーダンでは紛争により約100万人が避難民になっています。その難民キャンプでは5歳未満の子ども4人に1人が栄養失調や下痢・マラリアで命を落としています。」それぞれの内戦と難民キャンプの写真が次々に体育館のスクリーンにうつし出される。部族対立、利権をえようとするアメリカ・ロシア（ソ連）などの大国、対人地雷など様々な要素もいれながら発表は続く。「しかしアフリカ

には、長年続いた内戦が終わり着実に平和への道を歩んでいる国もあります。それは『アンゴラ』です。27年間もの暴力の応酬が続いていましたが、何回もの交渉がようやく実り、2002年に平和条約が結ばれ、難民となった人々も町に帰っています」彼らは、未だに続く困難にもふれながら私たちにできるいくつかの援助を提案している。

「私たちにできることは何かないのでしょうか。たった100円で救える命があるのです。肺炎や風邪の時に使う抗生物質を3.8瓶、脱水症状で死んでしまうのを防ぐ経口補水塩10袋、失明を防ぐビタミンAカプセル11人分・・・一人ひとりの平和を願う気持ちがたくさん集まればたくさんの命を救うことが出来るのです。現在3秒に1人のペースで幼い子どもが死んでいます。この地球で共に生きる地球人として、この現実をしっかりと見定めて、世界の動きに関心を持ちつつ取り組むことが、影から光へと歩いていく第一歩であると思います」

発表が終わったあと職員室でされた会話は、「社会のことをけっこう考えていてびっくりした」「人前で話すことが苦手ではずかしがり屋だったのに」「資料をよくここまで集めた。写真もすごいね」「久しぶりの男の子のがんばりだった」（このごろしっかりしていて目立つのは女の子が多い）など、二人の成長に関したことだった。

数日たったあと二人から話を聞いた。

「このテーマで研究しようと思ったのはイラク戦争の様子をテレビや新聞で報道していて世界の事を考えなくてはと思ったのが最初だった。一学期の総合学習の全校講演会で国境なき医師団の人とアンゴラの子ども・青年たちをとっている写真家・竹内弘真さんの話を聞いたことがきっかけだった。社会科（公民）の授業でスーダンの新聞記事を題材にした意見発表をしたこともよかった。講演のときにももらった国境なき医師団のパンフをみて、小遣いをためて5千円送ったら、毎月家に医師団のパンフがおくられてきてよけい関心が出てきた。将来は海外で援助関係の仕事をしたいと思っている」と話していた。4月に1人は国際理解教育に力を入れている高校に、もう1人は野球少年で野球の盛んな都立高校に進学した。

#### ② 「本田中の総合学習」

本校の総合学習を全校でとりくんでいる内容を紹介する

##### 0 ねらい

以下の4点がねらいとしてとりあげられ、子どもたちにも4月にこの中身について話している。

① 学習方法を工夫し、様々な「学び方」や発表の方法を身につけよう。

- ② 地域の自然や文化、人々の生活や過去に学び、現在を見つめ、未来をよりよく創造していくためにどうしたらよいのかを考えよう。
- ③ 様々な方とのふれあいや諸施設での調査・体験活動を通して、生き方を学び、自己の将来に生かしていこう。
- ④ 学級・学年の枠をこえたグループでの活動を通じて、協力して学び合う大切さを知ろう。

「総合的な学習の時間」のねらいについて、文部科学省や教育委員会が説明する時に必ず入っているのは、「学び方を学ぶ」という点である。確かにこのことは、必要な点ではあるが、それだけでは不足に思われる。

現在の課題や人類的課題は私たちのさしせまったテーマとしてマスメディアから報道され、家庭の会話のなかでも日常的に話されている。環境・平和・国際・健康・福祉・地域といったテーマを、子どもと大人が横並びになって追求し、その道でがんばり、悩んでいる人と出会い、影響をうける・・・そんなダイナミックな学びとしての総合学習に取り組めたら、意味を感じる学びとして生涯続くのではないと思われる。

#### ○ 1年間のながれ

二時間続きの総合学習を設けている。一学期は全校が集まっての講演会。グループの研究テーマ決め。二学期は、各グループの調査・体験活動の期間。三学期はまとめと発表を行う。夏休み前に、子どもたちは「環境」「平和」「地域」「福祉」「国際」「その他」「健康」のコースに分かれる。そして自分のテーマを決めていく。共同研究という形で友だちといっしょにグループをつくり取り組むところが多い。学校全体でのグループの合計は140を超える。

夏休みには、生徒たちはそれぞれのテーマを追求するために、新聞記事を集めて意見を書いたり、博物館に行ったりする。

二学期は調査・体験活動の時期。約140名の子どもたちが、図書館、教師との相談、インターネット、資料整理などで校内に残る。100名の子どもたちは、区内の図書館、立石駅でのアンケート、自転車によって水質検査に区内の河川をめぐる。中には、葛西の水族館まで海洋環境の情况进行きに行くグループもあれば、南アフリカの様子を聞きに上野にある日本国際ボランティアセンター（JVC）の南アフリカ担当者まで足を運ぶ子どもたちもいる。

三学期はまとめと発表の時期である。2月には、9ヶ所の教室で全員が発表し、3月には体育館で代表発表を行う。発表は保護者と地域に公開されている。

最後に、一学期に行われる課題を掘り起こすための講演の各テーマと講演者を示しておきたい。（ここ数年の講演から）

- ・「私の体験から」伊藤恵美子・・・耳の不自由な体験を語りつつ、障害者運動についても熱っぽく話す。本田中のそばに住む
- ・「環境問題に取り組むために」福岡清治郎・・・地域の靴屋さんを営みながら環境問題を学ぶためにシカゴ大へ通う
- ・「あなたの声が聞きたい—植物人間からの生還への挑戦」紙屋克子・・・看護師としての体験から看護が病気を治す大きな力をもっていると話す
- ・「知的障害者への理解を深める」高山義夫・・・知的障害者のある方とともに生活をしている指導員の立場から
- ・「葛飾の自然」五十嵐吉夫・・・水元自然クラブに所属するプロのカメラマンが撮った水元公園の生き物たちを映像で
- ・「立石の街づくり」豊田芳和・・・葛飾区の都市計画課に勤務。区は街づくりにどのようなビジョンをもっているのか
- ・「東京大空襲・命の尊さ」橋本代志子・・・町は火の海だった。その中で人々はどのように生きようとしたのか
- ・「国際ボランティア」長谷川賢治・・・小山内美江子氏が主催するNGOの大学生が語るカンボジアでの学校建設。ドイツ平和村
- ・「折梅の映画づくりをつうじて」松井久子・・・映画監督の仕事を通じて語る『老いと家族の人間模様』
- ・「被爆者として生きて」里見かよこ・・・胎内被爆をして生きていく。差別やいじめ、仲間と希望を語る

#### (2) 教科・総合学習の学力の相互発展の可能性

本田中の総合学習では、一人ひとりの子どもの興味・疑問にもとづいた自由研究が行われている。そのとりくみと教科学習がつなぎあい「問い」が深められていけたらと思う。

<体験→問い→調査・研究→発表・発信→持続する問い>という学びのサイクルが、教材と総合学習を通じて形成されていけたらと考える。その時、学力は広くとらえていくことが大切だ。学力というと、いわゆる読み・書き・算などの基礎的知識や理解を連想する。社会科でいえば、彼の名前や産物、年表などの重要事項といわれるものが入るだろう。ではこれらをマスターすれば学力が高いと言えるのか。そうではないと思う。自分やクラス、教師が設定したテーマに対し、今までの知識や理解した事柄を使って調査し、まとめ、分析する。自分なりの意見もち表現する。クラスに発表し仲間の意見も聞く。そのような自分の主体をとおし

た学びを通じて、集団も介しながら学力は形成されてくる。「問い」に対し、自分の主体を通して考え、そのプロセスのなかで様々な知識が能動化され、分析し、まとめられ、表現されていく—各レベルでの習熟をともしないながら—そこでついていく力の総体を「学力」と呼びたい。

今の時代は、大人でも解決しえないような地球的・現代的な課題に満ちている。大切なことは、前に述べた学びのサイクルの最後は、発表・発信ではなく、持続する問いである点だ。自分や仲間のいただいた問いに対し、簡単に終結しないで問いを持ち続け、それ自体を豊かにしていくことが、将来的に課題を担っていくことにつながると考えたい。

## 5 SDGsの視点で「総合的な学習の時間」と時事問題を結びつける

現代的課題・地球的課題を「総合的な学習の時間」のテーマとして設定する場合、何をよりどころにできるのか。SDGsの17の指標が有効であると考えられる。テーマ設定・研究のながれで考えると、全校または学年でSDGsの17の指標についてのリアルな実態を描く視覚資料・統計資料の提供を子ども・学生にする。生業・NGOとして関わりがある方を招き講演してもらうなど、人間と子どもたち・学生を出合わせるものがポイントになると思われる。その後、子ども・学生が、グループをつくり研究テーマを設定する。その時に、現実には起きている時事問題を介し、作成することが重要であろう。そのことが問題解決に取り組む切実性の保障になるからである。子ども・学生は研究ののち発表の準備に入る。できれば、その前に社会・世界・地域にどう働きかけをするのかを考え、実際に働きかけをさせたい。また調べるにしても、机上で調べるだけではなく、学校の外に出かけ調べたい。このながれに必要な時数は、50分の単位で2コマ、30週ほどが必要になると思われる。

このSDGsの17の指標での「総合的な学習の時間」の取り組みの目標とそれにかかわる資質・能力はどのようなものであろうか。目標は、「持続可能な社会の創り手、担い手を育てる」ことになろう。

資質・能力は、学習指導要領に従えば①知識・技能②思考力、判断力、表現力③学びに向かう力に分けられるだろう。それぞれの構成要素としては①には「SDGsの諸課題に対する理解とその関連性への理解」「SDGsの諸課題について子ども・学生が介入できる方途についての理解」があげられる。②については「自分への気づき、他者とのコミュニケーション」「批判的に創造的な思考」「メディアリテラシー」「現実を問い

直し、社会変革のために何ができるかを考え、判断し、社会的責任を持つことができる」があげられる。③については「自己肯定感、アイデンティティを持つことができる」「人権や多様性を大切にすることができる」「公正や平等、参加と共生の観点から社会に関わろうとすることができる」「人や社会は変わることができる」という感覚が持てる」があげられる。<sup>(7)</sup>

これらの資質・能力は、SDGsの17の指標によるコントロール下にあるため一般的なものより、共生、公正、循環、変革・創造に重心が置かれるものとなっている。

本論文における註

- (1) 清水幾太郎「時事問題と教育」『私の教育観』河出書房 p158、159 1950年
- (2) 文部省『初等科国語 三』昭和十七年二月十六日発行
- (3) 文部省『教師用初等科国語 三』昭和十七年
- (4) 勝田守一「時事問題は問題である」『勝田守一著作集I』国土社 p217 1952年
- (5) 黒沢英典・和井田清司・若菜俊文・宇田川宏『高校初期社会科研究「一般社会」「時事問題」の実践を中心として』学文社 1998年 p110~145
- (6) 池野範男「批判主義の社会科」『社会科研究』第50号 p61~70 1999年
- (7) 田中治彦・奈須正裕・藤原孝章編著「SDGsカリキュラムの創造」学文社 2019年 p56  
SDGs学習のフレームワーク 藤原孝章作成